

はなわ ほきいち
塙 保己一に学ぶ

江崎 昭

塙保己一は江戸時代の国学者である。埼玉県児玉町の農家に生まれた。6歳で眼を患い、光を失った。だが、彼には一つの取り得があった。寺子屋で教わるどんな書物も、一度聞いたら忘れることがなかった。

江戸では学問で身を立てている盲人がいるという。14歳の時、江戸の雨富検校の下に弟子入りした。ところが期待していた学問には触れることができず、朝から晩まで按摩治療や三味線の稽古ばかりである。1年ばかり修行したが上達しない。遂に彼は悲観の虫に取り付かれ、身を投げて死のうとした。

これが親方の耳に入り、ひどく叱られた。「命を捨てる気になりゃーどんなことでもできる。一体お前は何をしたいんだ。」

「お師匠様、私は学問をしたいのです！」

親方も彼の記憶力の良さには感づいていた。また、盲人の地位向上のため、学問が必要であることも痛感していた。

「そうか、お前の望みはわかった。やってみるがよい。ただし、3年経っても見込みが立たないようだったら国許へ返すぞ。よいな！」

「有難うございます！」

彼は畳にひれ伏してお礼を言った。

学問をするといっても、自分で本を読むことができない。そこで一計を案じた。「書物を読んで頂ければ揉み療治代はいりません」というものであった。

隣屋敷に松平乗尹^{のりただ}という旗本がいた。蔵書自慢で大変な勉強家であった。その乗尹から「書物を読んであげよう」と申し出

があった。朝6時から8時まで乗尹の家に出かけ、一日おきに書物を読んでもらえることになった。読書が始った。身体中を耳にして聴いている彼の姿は乗尹を感動させた。女中がお茶を運んできたが、あまりの真剣な姿にしばし足を止め、身動きするのも憚られたという。

「毎月、源氏物語や和歌の講義をしてくれる萩原宗固^{そうこ}という先生がいる。お前も一緒に聞いてみてはどうか。」

彼は飛び上がるほど嬉しかった。15歳のとき、宗固の門人となり、古事記、万葉集などを学んだ。宗固の勧めで、川島貴林から漢学、神道、儒教、仏教を、また山岡明阿から律令や行政を学んだ。宗固は、彼の才能を見抜き、育てた優れた人物であった。

学問を介して交友の輪が広がって行った。その一人が大田南畝である。南畝の持っているきらりと光る言葉、漢字の深い知識は、彼にとって無くてはならないものであった。南畝もまた、何事にも全力を注ぎ、温厚で隔たりのない彼に近づいていった。

彼が23歳のとき、宗固の勧めで加茂真淵に師事することになった。ここで日本書紀など六国史を学んだ。門人300人といわれ、本居宣長、村田春海らが居た。盲人の身でありながら、学問を通して多くの学者・文人と知遇を得ていった。

彼の学者としての名声は次第に高まり、訪ねてくる者で部屋が一杯になるほどであった。しかし、日々の生活は贅沢をせず、少しでもお金ができると書物を買った。

彼は多くの書物が散逸していることを嘆いていた。あるものは大名屋敷に、また公家屋敷に、またあるものは神社・仏閣に、である。これでは学問を志す者にとって系統だって書物に接することは難しい。「古今の文書の保存研究をやって、世の中のお役に立てよう！」前人未到のこの事業こそ、自分に与えられた天命であると感じた。まず、出版する叢書の名前を「群書類従」と決めた。33歳のときである。

立案から8年、初巻を刊行した。全670巻を完成するには、実に41年を要した。彼は74歳になっていた。文書数1273点、25類に分かたれている。あらゆる日本文化の歴史を解明しようとするとき、群書類従は資料としてゆるぎない価値を持った文献と言われている。現代使われている400字詰め原稿用紙は、このときの板木からきている。

43歳のとき、「大日本史」の編纂に推挙された。徳川光圀が大日本史編纂のために設立した彰考館（水戸家の江戸屋敷）で行われた。そこには、天下の学者が集まっていた。最初、百姓出の盲人が加わることに反対していた。しかし、彼の学識とその謙虚な態度に学者たちは感嘆の声を上げ、賛同していった。

47歳のとき、彼は事業を拓げていった。漢学・国学では、専門組織が育っている。だが、歴史・律令の面ではそれが無い。そこで公的機関として「和学講談所」の設立を老中松平定信に申請し、認可を得た。講談所は旗本屋敷の内にある。そこに集まる学者、門人の多さに改めて彼の偉大さがわかる。講談所はその後、明治政府に引き継がれ、東京大学資料編纂所になって今に続いている。

時代は下り、昭和12年、ヘレン・ケラーが「温故学会」を訪問した。

「幼い頃、母親に日本の塙保己一の偉業と、不屈の精神を聞かされ、自分も発奮した」と彼女は語った。現在も温故学会（東京都渋谷区）として彼の偉業を伝えている。

最後に彼が盲人の身でありながら学問で身を立てることのできた訳を考えてみたい。

- ①学問へのたぐい稀なる情熱とその記憶力。
- ②周りの人の協力を得ていく人柄の良さ。
- ③幕府、大名の支援を得ていく経営能力。

保己一は、自己の才能と彼を取り巻く人的・物的環境を最大限に活かしつつ、公私の望みを達成すべく、時代を生き抜いた。

参考文献 花井泰子著「塙保己一の生涯」
(紀伊国屋書店刊)



保己一「源氏物語」講義の図

戻る